

C.H. クーリー社会学の特質

著者	小川 祐喜子
雑誌名	白山社会学研究
号	17
ページ	19-29
発行年	2010
URL	http://id.nii.ac.jp/1060/00003462/

C.H.クーリー社会学の特質

小川祐喜子*

1.はじめに

アメリカ社会学は、A.コントの影響を受けたが衰退の一途を辿ることになった。コントの社会学に代わってアメリカ社会学に浸透したものが、H.スペンサーの社会学である。「アメリカの衣装をつけたスペンサー主義者」と呼ばれた W.G.サムナーは、進化論と動物有機体のモデルとを社会に適用し、社会有機体説を確立した人物である(Coser,1978=1981:35, 船津,1999:55)。19世紀の中葉から20世紀の初頭にかけてのアメリカ社会学は、サムナーの影響で社会有機体説が典型であると言われ、異常なまでに流行し、高く評価されていた時代であった。

サムナーの社会有機体説が高く評価されていた時代に、「生物学的過程への依存と自由放任原理への依存との双方から解放する役割を果たし」(Coser,1978=1981:48)、「生物学の足枷から解放する最初の大きな試み」(Coser,1978=1981:51)を行なった人物が L.ウォードである。ウォードは、目的的过程を強調し、社会組織の独自で人為的な性格を強調しながらも、繰り返しダーウィン主義の言語と進化論の色彩に帯びた宇宙論的思弁に逆戻りしていくことで(Coser,1978=1981:51)、当時のアメリカ社会学で流行っていたスペンサーの理論体系の土台を揺るがしたのであった(1)。また、F.H.ギディングズは、社会の本質を生物学的な過程ではないことをいち早く指摘し、『同類意識』(consciousness of kind)を規定し、心理学的社会学の基礎を築きあげた人物である。

アメリカ社会学は、ウォードとギディングズの研究により、生物学的社会学から心理学的社会学へと大きな変化を迎えていくことになる。そして、この時代、彼らの影響を受け、1920年代に至るまで持続する心理学的社会学に貢献したもう一人の人物がミシガン大学の C.H.クーリーであった。

クーリーの社会学において有名なものには、「鏡に映った自我」概念(looking-glass self)と「第一次集団」論(primary group)がある。「鏡に映った自我」概念が自我論として評価されてきたところは、「自我関係あるいは自他の相互作用」(磯部,2006:42)の点である。また、「第一次集団」論が注目されてきたところは、第一次集団の概念を提供し、社会の第一次理想(primary ideals)の形成を促進し、この理想を社会全体に拡大的に浸透させる力があることを主張したところである(吉田,1972:112)。

そこで本論では、彼が生きたアメリカ社会およびアメリカ社会学の発展のなかで、彼が見出してきた思想を辿り、彼の社会学の特質を明らかにしアメリカ社会学へ貢献について論じる。

* 東洋大学人間科学総合研究所奨励研究員、東洋大学社会学部非常勤講師

第1節 クーリー社会学における「個人と社会」

クーリーが社会学者としての人生を歩み始めた時期のアメリカ社会学とは、スペンサーの社会学の影響を残しながらも発展途上の時代であった。このような時代背景のなか、彼もまた同時期の研究者と同じくスペンサーの思想に魅せられたひとりであった。けれどもクーリーの思想は、心理学的社会学の先駆けであったギディングズとウォード、J. デューイの影響もありスペンサーに完全に依存するものではなかった。彼の思想とは、スペンサーの考えを深め、より深い意味での社会有機体説を主張するものであった(Jandy,1942:84)(2) また、C.R.ダーウィンからは、人間世界を理解するための自然の一般のプロセスとその研究方法を学んだ(Cooley,1929b:4)。そして、ダーウィンが生物学の世界で発見した複雑な相互関係から、生命の有機的統一と全体性の感覚を見出したものである(Coser,1978=1981:77)。クーリーは、彼らの思想から社会学における人間性、自然、知性、社会的自我やアイデンティティの起源や特徴などに関心をもっていったのである(Franks & Gecas,1992,Scheff,2003)。

このような関心から導きだされたクーリーの考える社会とは、個人と社会とを切り離して説明されるものではなかった。それは、個人ありきの社会であり、社会ありきの個人という、個人と社会との表裏一体説を強調するものである。ここでの個人と社会とは、各個人のマインドに描かれる個人であり社会である。社会は「トーマス、ヘンリー、スーザン、ブリジットなどが『I』と名付けている一定の観念の接触や相互の影響としてマインドの中に存在する」(Cooley,1902:119)。それは、オーケストラがさまざまなものと関連し合う音響から成り立っていることと同様に、マインドのさまざまな個体から成り立つ有機的なものである。個人と社会とは、「絶え間ない会話の中に存在する」(Cooley,1902:90)がゆえに、有機的な関係であり「社会は機械的な有機体ではない」(Jandy,1942:86)。

個人が特有の社会にじかに気づいているということは、国家や時代といったような大きな社会全体に気づいている限りにおいてである(Cooley,1902:119)。個人のマインドに存在する社会とは、自分が所属している集団や似通った集団に所属しているひとのマインドにも存在する社会である。また、個人が社会より個人を重要視することは、社会よりも個人の方が実在するものとして捉えやすいからにすぎない。個人が社会よりも重要であるということは、「実在として五感に感じとられているだけで、ごく自然にかつ容易に思い浮べることができる」からである(Cooley,1902:7-8)。

クーリーによると、ひとが個人と社会とを対照的なものとして捉えてしまうことは、育ってきた伝統による思考様式が強化されているからである。それは個人においては、「単なる個人主義」(mere individualism)、「二重の因果関係」(double causation)、「原初的な個人主義」(primitive individualism)、「社会能力観」(social faculty view)として表されるものである(Cooley,1902:43-47)(3)。つまり、彼における個人と社会は、同じものの相補的な局面として密接に関連しており、発展も一方から他方への発展ではなく、両局面が低次の類型から高次の類型へと発展するものである。

クーリーが、個人と社会との表裏一体説を強く主張することは、個人主義的な考えからでは個人と社会とを正確に捉えることができないと考えたからである。個人と社会とは、

マインドがさまざまな個体から成り立つゆえに、マインドのうちに存在する。それらマインドの解釈とは、個人の想像によるものである。すなわち、他者のマインドは、各個人の想像によって解釈できるものということである。

クーリーにおいて、「マインドのなかの想像的な諸観念がなくても、人びとを直接に知ることができる」(Cooley,1902:120)という主張は理解できないものであった。「人びとがお互いに対して抱く想像とは、社会の確固たる事実(the solid fact of society)である」(Cooley,1902:121)。それゆえに、彼は、これらの想像を観察し解釈することが、社会学の第一目的でなければならないと結論づける。彼は、この目的に対して「客観的内観」(objective introspection)を用いてアプローチし個人と社会を解明していったのである。

第2節 クーリーの社会学における人間の特性

彼が「客観的内観」方法を用いて個人と社会とを捉えるなかで発見したもののひとつが、「第一次集団」論である。それは、フェイス・トゥ・フェイスの関係から成る「親しい結びつき」(intimate association)と協力とによって特徴づけられる集団である。この集団には、家族、子どもたちの遊び仲間や近隣集団などが含まれる。

クーリーは、遺伝により継承されるもの以外は、他者とのコミュニケーションにより生成し形成されると主張する(Cooley,1909:1970=9:11)。ここでの他者とは、「第一次集団」の他者である。すなわち、家族、子どもの遊び仲間や近隣集団などは、一般的なものであり、発達のあらゆる段階で付属している。したがって「第一次集団」は、「人間性」(human nature)と人間の理想において普遍的なものの主要なひとつの基礎である(Cooley,1909:1970=24:25)。

クーリーにおける「人間性」とは、個性的な側面である非社会的な傾性と能力、社会的な傾性と能力とに二分される。さらに、「人間性」は三つの意味合いに区別されている。

第1が遺伝により継承される「人間性」である。それは、人間の出生の存在を示す、細胞、衝動、才能である。しかし、それらは社会的発達要因としては現われることはない(Cooley,1902:31-32)。

第2が、「親しい結びつき」のある関係もしくは「第一次集団」から形成される「人間性」である。この「人間性」とは、ひとが他者との関係のなかで自覚している社会的センチメントや気持ちのようなものである。それは、集団の規範によって形成された賞賛の愛、非難の憤り、競争や社会常識の善悪である(Cooley,1902:32)。

第3が、「人間性」の長所と短所について議論される一般的ではない「人間性」である。それは、観念の一般性と特別な状況や制度から生じる要素として採取される「人間性」である。例えば、吝嗇な人が、他の状況下においては金銭に対してとても気前のよい人となったとする。これは、状況が変われば個人の考えや受け取り方に変化が現われることを示している。ここでの「人間性」とは、状況や制度が異なることで変化が見られるものであり、変化し続けるものである。

人間は「人間性を生まれながらにしてそなえているわけではない」(Cooley,1909:30=1970:30)。それは、仲間同士のつながりをとおす以外に獲得する方法は

ない。クーリーにおける「人間性」とは、「第一次集団」の他者とのコミュニケーションを通して形成されることになる。

「人間性」は、「第一次集団」とのコミュニケーションによって、快楽や食欲、復讐、力についての誇示などの「動物性」(animal nature)のものから洗練されるものとなる(Cooley,1909:36=1970:35)。それは、「第一次集団」の他者との間で生じる共感により訓練され、制御され、従わされるものとなり、愛情、怒りや野心となる(Cooley,1909:36=1970:35)。すなわち、ひとは「第一次集団」との関係で集団における共通性をもった「第一次理想」を成長させ、次いで「第一次理想」を拡大したものとして「社会的理想」(social ideals)を形成する(Cooley,1909:33=1970:32)。それら全体をなすものが、クーリーにおける「人間性」である。

クーリーの「第一次集団」とは、個人の社会性と理想とを形成するうえで基本的であることで第一次的である。それは、「親密さ」を特徴として作られる集団である(Cooley,1909:23=1970:24)。彼の言う「人間性」とは、自分が属する集団の成員が何を考え、どのような感情を抱くかについて想像することによって成長していくものである。それは、個人にマインドが生まれ、モラルがそなわったことを意味する。

クーリーは、「客観的内観」方法を用いて「第一次集団」論を展開するなかで「人間性」の形成過程を明らかにした。そして、「第一次集団」の他者との関係で形成される「人間性」の形成は、彼の社会的自我論とも関係している。クーリーにおける自我とは、意識の前提ではなくコミュニケーションから生じ、他者に依存するものとされる。それゆえに彼は、「近代的自我」のイメージである孤立的な自我のあり方を否定し、「ワレワレ」あつての「ワレ」とする自我の社会性を強く主張している(4)。そして、彼は W.ジェームズの見地を参考に外部世界とのさまざまなやりとりを通して形成される自我形成のプロセスを発見したのである。

それが「鏡に映った自我」概念である。「鏡に映った自我」とは、第 1 に他者が自分をどのように認識しているかについての想像、第 2 に他者が自分をどのように評価しているかについての想像、第 3 にそれに対して自分が感じるプライドや屈辱などの自己感情である(Cooley,1902:184)。

彼の言う社会的自我とは、他者の認識と評価を自分の想像によって捉え、その想像から生じる自己感情である。彼は、他者の存在を重視しながらも他者の行為や態度を重視しない。クーリーの考える他者とは、自分が他者のマインドを想像することで理解される他者である。

すなわち、クーリーにおける想像とは、人びとがお互いに対して抱く想像であるがゆえに、他者のマインドを知ることのできる社会の確固たる事実ということである。それは、経験的世界から隔離されるものではなく、現実の他者との社会関係から成る相互主観的なコミュニケーションによるものである。

他方、クーリーが自我とする自己感情は、単なる無意識による感情ではない(Cooley,1902:184)。自己感情には、本能的なものが含まれている(Cooley,1902:170)。けれども、自己感情は、社会的活動を刺激し、全体をまとめる重要な役目と結びついて進化す

る感情であり、経験によって規定され、発展していく感情である (Cooley,1902:171)。

それは、『子どもによる自己言語の早期使用に関する一研究』(1908)で明らかにされている。自己感情は、人称代名詞の習得プロセスで生じてくる感情である。正しく人称代名詞を用いることのできない子どもは、自己の主張、感情を音(言語)として発する。子どもは、人称代名詞の習得を日常生活で起こる強い感情とともに発言していくことで習得していくのである。したがって、人称代名詞は自己の主張である自己感情と関係して用いられる言語である(Cooley,1908:232)。さらに、自己感情は自己所有化 (self-appropriation) 行為のなかで生じる。クーリーは、自分の子どもの観察を通じて自己感情の第一の芽生えが、玩具や哺乳瓶をコントロールする努力と結びついていることを発見した (Cooley,1902:177)。

クーリーは自分の子どもの観察から、自己感情が他者の注意を引くことと関係しており、他者をコントロールするという社会的欲求があり、自我に関して非常に大きな役割のある感情であることを見出したのである(Cooley,1908:232)。自己感情は、自らの経験を通じて知ることができる感情である。それは、言い習わされたものとしては理解できない感情であり、一般的な共通語としても存じていないが、他の種類の感情とは明らかに区別される。それは怒り、恐怖、悲痛といったものである (Cooley,1902:175)。

すなわち、クーリーにおける自我としての自己感情とは、経験的自我(empirical self)と呼ぶものであり、日々の生活で理解され確認されるもの(Cooley,1902:168)とする。それは、「第一次集団」とのコミュニケーションで形成される感情であり、個人と社会との表裏一体説を含んだ社会的自我(social self)である。

第3節 クーリーのアメリカ社会論

クーリーが、アメリカ社会学に残したものは、「鏡に映った自我」概念や「第一次集団」論だけではない。彼は、南北戦争後の殺伐とした時代のアメリカ社会に「近代的コミュニケーション」と「デモクラシー」の特徴を発見している。

クーリーの生きたアメリカ社会とは、目まぐるしい発展を遂げていた。彼は、社会を有機的なものと捉え、社会有機体が「人間性」の原理に従って運び込まれることを繰り返し説き、コミュニケーションが人間関係を存在させ、支え、発展させるメカニズムであると考察する。

クーリーは、「第一次集団」論におけるコミュニケーションを「第一次的なコミュニケーション」と位置づける。そして、情報メディアの発達に伴い進歩していく「近代的コミュニケーション」が、「第一次集団」のコミュニケーションが拡大したものとする。彼によると、「近代的コミュニケーション」には、個人の内面や意識生活に効果をおよぼす原因になるものと個人の思考が目に見えるかたちとして存在するものがある (Cooley,1909:64=1970:58)。

話される言語は、時間の経過とともに忘れられるが、筆記というコミュニケーションの発達により「保存」が可能となる。書き表わされた言語は、書き残されることで再度それについて思考することを可能にする。これがコミュニケーションにおける「保存」である。

また、情報メディアの発達、多くの人に分け隔てなく情報を伝えることを可能にした。それがコミュニケーションにおける「普及」である。クーリーは、「近代的コミュニケーション」という新たなコミュニケーションの展開のなかに、「保存」と「普及」を読みとったのである(Cooley,1909:76=1970:68)。

クーリーによると、「保存」と「普及」からなる「近代的コミュニケーション」は、広範囲にわたる多くの人々に共通の感覚をもつことを促進させた。印刷機の発達は、新聞というコミュニケーションを生み出した。新聞の普及は、人びとに海を越えた他の国の出来事を身近なものにさせた。さらに、社会的接触、空間の拡大、時間の迅速化をもたらした(Cooley,1909:81-83=1970:72-73)。しかし、新聞には、言葉の氾濫や表面的な感情を訴える機能もある(Cooley,1909:84=1970:74)。新聞はゴシップ性を拡大させる。それは、多くの人々が同じ冗談で笑うことやスポーツに対して同じように興奮し、同じ対象に対して共有できる仲間がいることを確認させ、人間的な道徳性の基準を補強していく。ゴシップの拡大は、ひとに「広範な社会性と共同体の感覚を促進」させる(Cooley,1909:84-85=1970:74-75)。

また、都市では「選択」、農村では「孤立」といったそれぞれの個性が育つ。「近代的コミュニケーション」は、「選択」を育てるが、「孤立」は「選択」に侵されていく。都市には、個性を育てあげる機能や特殊な能力に有効な機能があり生産的な独創性がある。他方、農村には、環境や自然とフェイス・トゥ・フェイスに関わっているために都市のようなゴシップ性はない。農村の人びとは、都市の人びとのように新たなコミュニケーションを存続することは不可能であるが、都市の人びとが持ちえないものを有している(Cooley,1909:94=1970:82-83)。

クーリーによると、「近代的コミュニケーション」は、同じ傾向や興味を抱くひととひととの交流を促進させ、精神的結びつきやその特殊性を励ましあう状況を促進させる(Cooley,1909:91-92=1970:80)。他方、それは、個人の思考と感情に適当な心理的習慣や表面的な親切と適応性をもたらし、他の個人を同じような人間であろうとすることに熱心にさせる(Cooley,1909:93=1970:81)。これが、クーリーが警告する「近代的コミュニケーション」の「皮相性」と「精神的緊張」である(Cooley,1909:98=1970:86)。

そして、クーリーは、「近代的コミュニケーション」が発達するアメリカ社会において、「公衆意志」(public will)で成し遂げられ組織的な世論の支配を意味するものが「デモクラシー」とする(Cooley,1909:118=1970:100)。「大衆はいつも誤っている」ということは真実ではない(Cooley,1909:153=1970:127)。大衆は、組織や小集団が不安定であるゆえに群集化したものにすぎず、組織が安定していれば大衆が群集化することはない。組織や小集団といったものは、「多かれ少なかれはっきりといろいろな階級から構成」される(Cooley,1909:209=1970:168)。それら組織や階級を統合しているものが制度である。制度は、「公共心の明確で確立した側面」として、「マインドの習慣や行為の習慣として個人のなかに存在する」(Cooley,1909:314=1970:246)が、究極の性質においては世論と異ならないものである。

そして、クーリーにおける組織、階級、制度を含んだものが、社会構造である。そして、

社会構造で明確かつ永続性をもった部分が、動物世界の属、種、変種といった概念と類比する社会類型と呼ばれるものである。彼によると、それらは関連性をもった体系、秩序をもって存在し、変化や相互の競合、繁栄と滅亡からは免れないものである。また、柔軟性に富むこともあれば硬直化することもあり、様相が相互に重なり合うこともあれば重なり合わないこともある(Cooley,1909:22=1970:23)。

クーリーは、人びとが生活を個々のものとして認識することを忘れずに、類型、過程、組織として認識することを学ばなければならないと指摘する。さらに、問題を正しく理解するには、個人を全体によって、また、全体を個人によって解釈できなければならないとする(Cooley,1909:22=1970:23)。彼は、当時の目まぐるしく発展し変化していくアメリカ社会で、「近代的コミュニケーション」を発見し、「公衆意志」によるものを「デモクラシー」として描いたのである。そして、「デモクラシー」を成し遂げる「公衆意志」の背後にある指導力が、「第一次集団」にあらわれる「より持続的な性格をもつ人間性」(Cooley,1909:419=1970:326)と結論づけている。

すなわち、クーリーの「デモクラシー」の原型とは「第一次集団」にあたる。彼が抱き理想とする集団、組織、社会は「第一次集団」が拡大したものであった。けれども、実際に彼が生きたアメリカ社会では、家族や教会に解体が訪れており、彼はその危機に直面していたのである。

クーリーによると、「人間性」は仲間同士のつながりをとおして獲得されるものであり、高頻度に変化しやすいものである(Cooley,1909:30=1970:30)。それは消えてなくなるものであり、ある状況下においてはコントロールされるものである。クーリーは、「近代的コミュニケーション」の発達や「デモクラシー」が成功をおさめていないアメリカ社会では、「第一次集団」で育まれる「人間性」がコントロールされていることに気づいていたのである。

第4節 アメリカ社会学へのクーリーの貢献

クーリーは、アメリカ社会学を築き上げた第一世代の一人として位置づけられ、その多くが「鏡に映った自我」概念と「第一次集団」論を中心に語られている。しかし、身近な生活を通して育まれた彼の社会観は詳細に知られてはいないといえるだろう。

G.H.ミードによると、クーリーは、異なった方法で同じ現実を証明した。『人間性と社会秩序』(1902)では、コミュニティの諸制度が諸個人の有する社会習慣であることを証明した。次いで『社会組織論』(1909)では、コミュニティの組織化が人びとが生きて行く方法であることを証明し、コミュニティの発見とは『社会過程』であることを証明したのである(Mead,1930:694)。

まず『人間性と社会秩序』では自我論を明確に述べている。「鏡に映った自我」概念は、「社会化を超えた自我」(oversocialized self)でも「負担となる自我」(unencumbered self)のどちらでもない。「鏡に映った自我」は、別個の自我イメージが他者との相互作用およびコミュニケーションを通じて形成されるといった開かれた自我像を表現している。そして、『社会組織論』では、社会秩序概念が、「第一次集団」、世論、制度、「デモクラシー」の概

念で基礎づけられ、発展したものとなっている。シューベルトによると、クーリーの「デモクラシー」とは、単なる政治形態をたどったものではなく、生活類型が人類の社会性において徹底的に探求されたものとなっている。さらに、『社会過程論』では、クーリーが「プラグマティック法」(pragmatic method)と呼ぶ社会変化が取り入れられている。社会変化とは、絶え間なく起こっている行為問題におけるもろく、終わりなき相互作用過程である(Schubert,1998:2-3)。

クーリーは、この3部作によって彼自身を社会の一員とみなし、人間性によって参入した社会の現実を彼自身が感じ取り、思考したことを客観的内観方法によって証明したのである。それは、社会とは意識の事柄であり、その意識とは社会的なものである。自我とは、意識の前提ではなくコミュニケーションから生じ、自我と同様に他者に依存しているものである。そして、自我と他者は、想像の中に起源をもつということである。

ミードは、クーリーのマインドとコミュニケーションについての思想のなかに、社会的マインドと社会の有機的な構造や過程との関係が示されているとする(Mead,1930:699)。クーリーが依拠する「通常の心理学」(ordinary psychology)は、「マインドの意識過程が生理学的個人の生きた過程に対応するように、マインドの社会的過程は社会の生きた過程に対応する」(Mead,1930:699)。それゆえに、クーリーにおける「自我」は、他者がその個人に対して抱く観念を想像することから生じるものであり、それと相補的に、他者に対する観念が他者の自我へと組織化されるものとなる(Mead,1930:699)。

ミードによると、タルドは「個人がコミュニティの態度や様式によって規定されるような心理学的メカニズムを求め、それを模倣に見出した」(Mead,1930:699)。けれども、タルドが見出した模倣とはメカニズム的には不十分なものであり、「個人の性格と集団の性格との類似性を指す」(Mead,1930:699)だけのものになってしまった。また、ボードウィンは、心理学的に可能な模倣のメカニズムを循環反応によって仕上げようとしたが成功するに至らなかった。さらに、ジェームズの自我についての見解は、「自我が社会的環境を超えて広がっている」(Mead,1930:699)ことを示したものであり、他者とのコミュニケーションによる自我の形成を示すものではなかった。

クーリーは、意識のなかに社会過程が進行し、そのなかで自我と他者が生じることを見出している。この点においてクーリーの学説は、タルド、ボードウィン、ジェームズよりも優れていると評価している。そして、クーリーにおける、他者の自我に対する作用と自我の他者に対する作用は、マインドのなかにおける自我と他者との相互作用に他ならない(Mead,1930:700)。ミードは、クーリーが自我と他者とは経験の同一平面の場に確定したことは、社会心理学の思考の進歩にとって大いに重要であるとし、彼の学説のアメリカ社会思想の貢献について認めている(Mead,1930:700)。

けれども、ミードはクーリーが社会学の第一目的としていた「社会の確固たる事実を適切に提示することができたのか」(Mead,1930:701)ということである。すなわち、個人の意識において「社会の確固たる事実」を見いだせたのかということである。さらに、クーリーが社会の研究に科学的方法で適用する問題に興味を抱いていなかったということである(Mead,1930:703)。

ミードによると、自我はマインドの直接的特質ではない。自我は最初に個人的であって、その後社会的になるものではない。マインドそれ自体は、コミュニケーションを通して生じるものである。意識状態の解釈を通してでしか到達できない自我は、初めから社会的自我ではありえない。クーリーの見解には、他者の役割を取ろうとする客観的局面が見落とされている。クーリーは自我や社会が、原初的なコミュニケーションから生じることを見なかったし、それらのリアリティを初期の人間行為のなかで把握していない (Mead, 1930: 693)。

ミードの社会的行為とは、外的世界から区別された心的なものに先立つような地点にまで遡らせることが必要とされている。「人間という生物体は、クーリーが言及したような心的な経験をもつものに先行して、自分が音声ジェスチャーで話しかける他者の態度を取得し、この態度によって自分にも話しかけ、そうすることによって自我と他者をうみだす」 (Mead, 1930: 704)。すなわち、ミードにおける自我とは、意識の前提ではなく、コミュニケーションにおける行為や態度によって形成されるものである。

けれども晩年期のクーリーは、『農村社会調査へと適用される生活研究方法』(1929)でこれまでの研究には生活を知覚するものが不足していることを指摘している (Cooley, 1929a: 331)。クーリーは、量的な方法論とは方法的には問題はないが、想像的ではない観察は表面的と考えていた。ひとの顔の表情、ジェスチャー、言語などの特徴的社会的行為は、パターン化された現象であり、ゆえに厳密な科学の分類の手順が見落とされている (Cooley, 1929a: 332)。すなわち、ミードが批判するコミュニケーションにおける行為や態度といったパターン化された現象からでは、見落とされるものがあると考えていたのである。それゆえにクーリーは、ひとが日常生活において認知しているものの背後には、想像を通じての「目にみえるもの」と「聞こえるもの」との混合物があり、マインドに帰結している心的プロセスがあることを主張する。そして、人間の知識にとって現実的な基礎は、共感もしくはドラマティックな認識であることを指摘している (Cooley, 1929a: 338)。

おわりに

クーリーは、自分が生きたアメリカ社会を常に個人と社会の表裏一体の観点から考察していた。彼の「社会の確固たる事実」とは、人びとが他者に抱く想像であった。この想像を観察し解釈することが、彼における社会学の目的であった。彼は、社会心理学において、自我と他者とを経験における同じリアリティの平面のうえに樹立することに成功した。そして、「第一次集団」論では、社会を第一次集団のフェイス・トゥ・フェイスの組織化における結合と共同からその成長を捉えた (Mead, 1930: 704)。アメリカ社会学が生物学的社会学から心理学的社会学へと移行している時代においての彼の貢献は否定できないといえよう。

そして、最近の研究動向では、クーリーの「自己感情」に関するものおよびクーリーについての再評価するものが展開されている。とりわけ、T.J.シェフは、クーリーが「鏡に映った自我」概念で示したプライドや屈辱などの感情に焦点を絞って展開している (Scheff, 2003, Scheff, 2005)。さらに、他方で、G.ジェイコブスや (Jacobs, 1979, 2004, 2006)、

H.J.シュューベルトによってもクーリーの再評価が試みられている(Schubert,1998)。

これらの見解は、1970年代を機に現れた感情社会学の分野においては重要な意義をもつこととなるといえよう。クーリーにおける自我の居住場所となっているプライドや屈辱といった自己感情は、不安定感、低評価、誠実感、不誠実感により自我のありかたを異ならせる。自我と対立する自己感情は、自律的な自我の現れであるがゆえに、自律的で主体的な自我を形成することとなる。彼の感情を重視する見解は、彼の生きた時代では科学的検証が不可能とされていたが、感情社会学の研究分野では、重要なテーマであるがゆえに彼の理論は生かされてくると言えよう。

(注)

- (1) コーザーによると、自然は「発生」(genesis)の法則に従い進行するが、人間進化は「目的」(telesis)によって導かれる。ウォードは、この区別を導入することで二元論的解釈である「自然の進化が無目的的に進行するのに対して、人間の進化は目的的行為によって特徴づけられる」(Coser,1978=1981:48)見解を導き出した。
- (2) 学部時代よりデューイの講義を聴講していたクーリーは、ミシガン大学に戻った後もデューイの講義を聴講するとともに一緒に研究を行っていた(Schubert,1998:9)。彼は、デューイが社会はスペンサーが理解していたよりも深い意味での有機体であり、言語はその感覚中枢(sensorium)であると主張していた点で、彼と似たような見解をもっていた(Cooley,1929b:6)。
- (3) 「単なる個人主義」とは、個人的局面にもっぱら注意を向け、集団的局面をまったく二次的で付随的なものとみなすものである。「二重の因果関係」とは、社会と特定個人との間の力を分割させて、それぞれ別個の原因を想定するものである。「原初的な個人主義」とは、社会性が個性化にともなって生じるものであり、社会性を発達後半の付加的な所産とみなすものである。「社会能力観」とは、社会的とは個人のごく一部、それもあるかぎられた部分だけをさすものである(Cooley,1902:43-47)。
- (4) クーリーは、R.デカルトの「ワレ思う、故にワレあり」という命題に対して、第1に「ワレ」意識とは成長の進んだ段階に属するものにすぎない。第2に社会的もしくは「ワレワレ」という側面を除いて、個人的もしくは「ワレ」の側面を強調することは一面的であり個人的であると否定している(Cooley,1909:6-7=1970:8-9)。すなわち、クーリーにおける「ワレ」とは、「ワレワレ」を含む「ワレ」意識である。

(引用文献)

- Cooley,C.H.,1902,*Human Nature and the Social Order*. Schocken Books
- Cooley,C.H.,1908,“A Study of the Early Use of Self-Words by Child”, *The Psychological Review*,6:339-57
- Cooley,C.H.,1909, *Social Organization*, Schocken Books=1970 大橋幸,菊池美代志訳『社会組織論』青木書店
- Cooley,C.H.,1918,*Social Process*, Schocken Books
- Cooley,C.H.,1920,“Reflectios upon the Sociology of Herbert Spencer”, *In Sociological Theory and Social Research: Being Selected Papers of Charles Horton Cooley*, ed Robert Angell. New York: Holt

- Cooley, C.H., 1929a, "The Life-Study Method as Applied to Rural Social Research", *In Sociological Theory and Social Research: Being Selected Papers of Charles Horton Cooley*, ed Robert Angell. New York: Holt
- Cooley, C.H., 1929b, "The Development of Sociology at Michigan", *In Sociological Theory and Social Research: Being Selected Papers of Charles Horton Cooley*, ed Robert Angell. New York: Holt
- Coser, L.A., 1978, *A History of Sociological Analysis*=1981 磯部卓三訳『アメリカ社会学の形成』アカデミア出版会
- 船津 衛, 1999, 『アメリカ社会学の展開』, 恒星社厚生閣
- Franks, D.D. and V.Gecas, 1992, "Autonomy and Conformity in Cooley's Self-Theory", *Symbolic Interaction*, 15(1):49-68
- 磯部卓三, 2006, 「成長する生命体——C・H・クーリーの自己論再訪」, 大橋良介, 高橋三郎, 高橋由典編, 『学問の小径 社会学・哲学・文学の世界』, 世界思想社, 33-43
- Jacobs G., 2006, *Charles Horton Cooley Imagining Social Reality*, University of Massachusetts Press
- Jandy, E.C., 1942, *Charles Horton Cooley His Life And His Social Theory*, The Dryden Press
- Karpf, F.B., 1932, *American Social Psychology*, Russell & Russell=大橋英寿監訳『心理学の源流と展開』勁草書房, 1987
- Mead, G.H., 1930, "Cooley's Contribution to American Social Thought", *A.J.S.*, 35:693-706
- 小川祐喜子, 2007, 「『自己感情』と自己意識的『自己感情』」, 『白山社会学研究』, No15.
- Schubert, H.J., 1998, *On Self and Social Organization*, The University of Chicago Press
- Scheff, T.J., 2006, *Goffman Unbound A New Paradigm For Social Science*, Paradigm Publishers
- 吉田裕, 1972, 「クーリーの理論」, 新明正道, 鈴木幸壽監修, 『現代社会学のエッセンス [改訂版]』, ペリカン社